

沖田七尾線街路事業に伴う  
暁音寺周辺発掘調査報告書

1996年3月

益田市教育委員会

## 序

益田市教育委員会では、平成6年度から7年度にかけて益田地区に計画された「沖田七尾線都市計画街路事業（市施工部分）」予定地内にある曉音寺周辺の発掘調査を行いました。

沖田七尾線都市計画街路事業が行われる益田地区一帯は、中世の益田が色濃く残る地域であり、三宅御土居跡や七尾城跡など益田氏に関わる数多くの遺跡が知られています。

調査は、曉音寺鍵曲りの保存とこれを拡幅整備しようとする沖田七尾線都市計画街路事業との調整を図るために資料を得るために行いました。その結果、鍵曲りに関してはその成立時期を特定することはできませんでしたが、少なくとも近世には存在していたことがわかりました。また、奈良時代から平安時代にかけての土器が多量に出土したことは、今後の同時代を研究するうえで貴重な資料となることと思います。

本書は、この発掘調査の記録をまとめたものでありますが、広く各方面において活用いただき、この地域の歴史や文化財に対する理解と関心の高揚に役立つことができれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査にあたってご指導いただいた文化庁、島根県教育委員会、調査指導の先生方並びに多大なご協力をいただきました曉音寺をはじめ地元住民の方々に対し厚くお礼申し上げまして、報告書刊行のごあいさつをいたします。

平成7年3月

益田市教育委員会

教育長 田中 稔



## 例　　言

1. 本書は、市施工部分の沖田七尾線都市計画街路事業に伴い、歴史を活かしたまちづくり事業として益田市教育委員会が実施した、益田市七尾町イ867に所在する曉音寺とその周辺発掘調査の報告書である。
2. 現地調査は下記各年度にわたって行った。  
平成6年度 平成6年11月25日～平成6年12月28日  
平成7年度 平成7年10月16日～平成7年12月2日
3. 調査組織は下記のとおりとした。  

調査主体	益田市教育委員会 教育長　田中　稔
事務局	岡崎松男（生涯学習課長）・下瀬俊明（同課長補佐兼文化係長） 齋藤　守（主任主事）・長嶺勝良（同主事）・大畠哲也（同主事）
調査員	平成6年度：木原　光（生涯学習課文化係主任主事） 平成7年度：長澤和幸（　同　主事補）
作業員	岩本祥枝・岩本末子・岩本哲夫・大島　操・大谷ひとみ 大畠和子・大山和子・岡本敬子・杉内恵美子・中尾貞子 永安ユキエ・藤井典子・柳井友吉・山地喜一郎
調査指導	井上寛司（鳥根大学教授）・川原和人（鳥根県教育委員会文化財課主幹） 小林健人郎（滋賀大学教授）・五味盛重（財団法人文化財建造物保存技術協会参与）・千田嘉博（国立歴史民俗博物館考古研究部助手）・永原慶二（一橋大学名誉教授）・村上　勇（広島県立美術館主任学芸員）
4. 発掘調査にあたっては次の方々のご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。  
幸田秀一（住吉自治会長）・寺戸忠幸（吉川自治会長）・西尾克己（鳥根県埋蔵文化財調査センター調査第3係長）・山根康臣（曉音寺代表役員）
5. 掘図中的方位は磁北を示している。
6. 本書の編集と執筆は、木原の指導を受け、長澤が行った。

## 目 次

I.	調査に至る経過	1
II.	遺跡の位置と歴史的環境	2
III.	曉音寺の歴史と鍵山り	4
IV.	調査の概要	6
1.	平成6年度第1次調査	6
(1)	第1調査区	6
(2)	第2調査区	9
(3)	第3調査区	12
2.	平成7年度第2次調査	12
(1)	第4調査区	12
(2)	第5調査区	13
(3)	第6調査区	14
(4)	第7調査区	16
(5)	第8調査区	17
V.	まとめ	20

## 挿図目次

第1図	益田地区図	1
第2図	曉音寺と周辺の遺跡分布図	3
第3図	調査区配置図	5
第4図	第1調査区平面・上層断面実測図	7
第5図	第1調査区出土遺物実測図	8
第6図	第2調査区平面・土層断面実測図	10
第7図	第2調査区出土遺物実測図	10
第8図	第3調査区平面・土層断面実測図	11
第9図	第3調査区出土遺物実測図	12
第10図	第4調査区平面・土層断面実測図	13
第11図	第5調査区平面・土層断面実測図	14
第12図	第6調査区平面・上層断面実測図	15
第13図	第6調査区出土遺物実測図	16
第14図	第7調査区平面・土層断面実測図	17
第15図	第8調査区平面・上層断面実測図	18
第16図	第8調査区出土遺物実測図	19
第17図	明治初年頃の小字名分布図	21

## 図版目次

- 図版 1 調査地遠景、鍵曲り（東から）、鍵曲り（西から）
- 図版 2 第1調査区発掘状況（北から）、第2調査区発掘状況（東から）、第3調査区発掘状況（西から）
- 図版 3 第3調査区石組みの溝跡（東から）、第4調査区上層堆積状況（東から）、第4調査区土層堆積状況（南から）
- 図版 4 第5調査区発掘状況（北から）、同上列石（南から）、同上土層堆積状況（西から）
- 図版 5 第6調査区発掘状況（北から）、同上上層堆積状況（西から）、第7調査区発掘状況（北から）
- 図版 6 第8調査区発掘状況（北から）、同上土層堆積状況（東から）
- 図版 7 第1調査区出土遺物(1)
- 図版 8 第1調査区出土遺物(2)、第2調査区出土遺物、第3調査区出土遺物
- 図版 9 第6調査区山上遺物
- 図版 10 第8調査区出土遺物(1)
- 図版 11 第8調査区出土遺物(2)

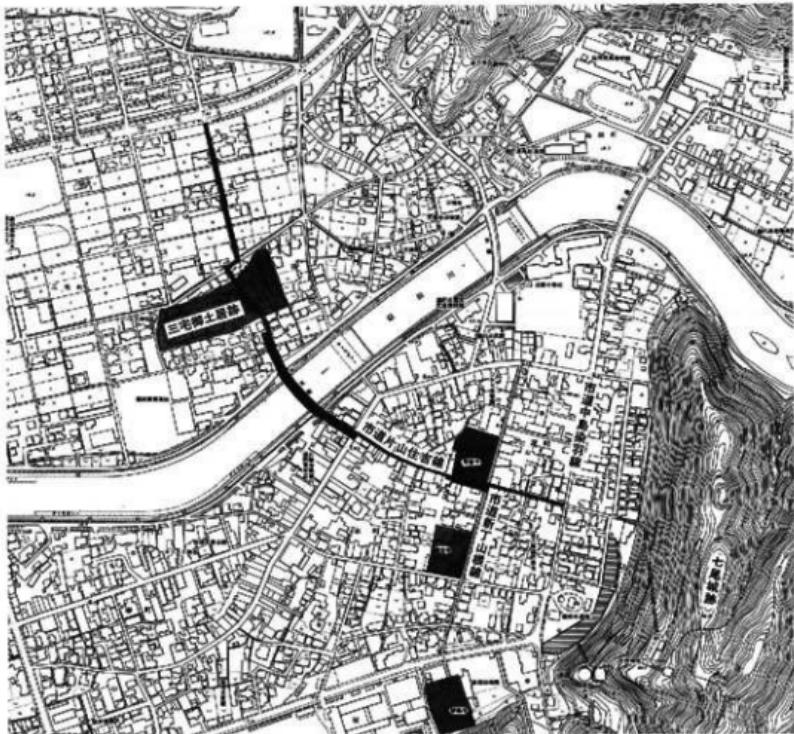


## I. 調査に至る経過

昭和58年（1983）7月に発生した山陰豪雨災害により、島根県西部は浜田市、三隅町、益田市を中心として大きな被害を受けた。そこで、同年8月に島根県益田市三隅町防災都市構想策定委員会が設置され、同年12月には街路網整備と河川改修計画を内容とする防災都市構想が策定された。その一環として、昭和59年6月に沖田七尾線都市計画街路事業が計画決定された。

この街路整備事業は、国道191号と市道中島染羽線を結ぶ市道片山住吉線を防災道路として12mに拡幅する計画で、国道191号より大橋までを島根県が施工し、大橋から都市計画街路中島染羽線までを益田市が施工するものであり、現在市施工部分については用地取得が進みつつある。

ところが、事業予定地の市施工部分には暁音寺前で道が食い違い屈折する鍵曲り状の道が存在し、また、この路線は平成6年6月に策定された『益田市歴史を活かしたまちづくり計画』の中で「中世七尾城跡の遺構である城下町の歴史的みちすじ」と位置付けられ、



第1図 益田地区図

併せて鍵曲り状の道が中世七尾城下町の防御に関わる遺構ともいわれることから、益田市教育委員会では街路事業と鍵曲り状の道保存との調整を図るうえでその成立時期を把握することが必要との判断をして、事業の実施に先立って平成6年11月に第1次調査を実施した。この調査では地割りの痕跡から鍵曲り状の道の成立時期を推定することを目的として、道の西側を対象として、調査区を道路の両側に配置したが、成立時期などの直接的な手がかりは得られなかった。

次いで平成7年10月に、直接的な手がかりを得るために第2次調査を実施した。この調査では、第1次調査での目的と併せて、鍵曲り状の道がかつては直線状の道であった可能性を検証することを目的として、道部分を中心に調査区を配置した。

## II. 遺跡の位置と歴史的環境

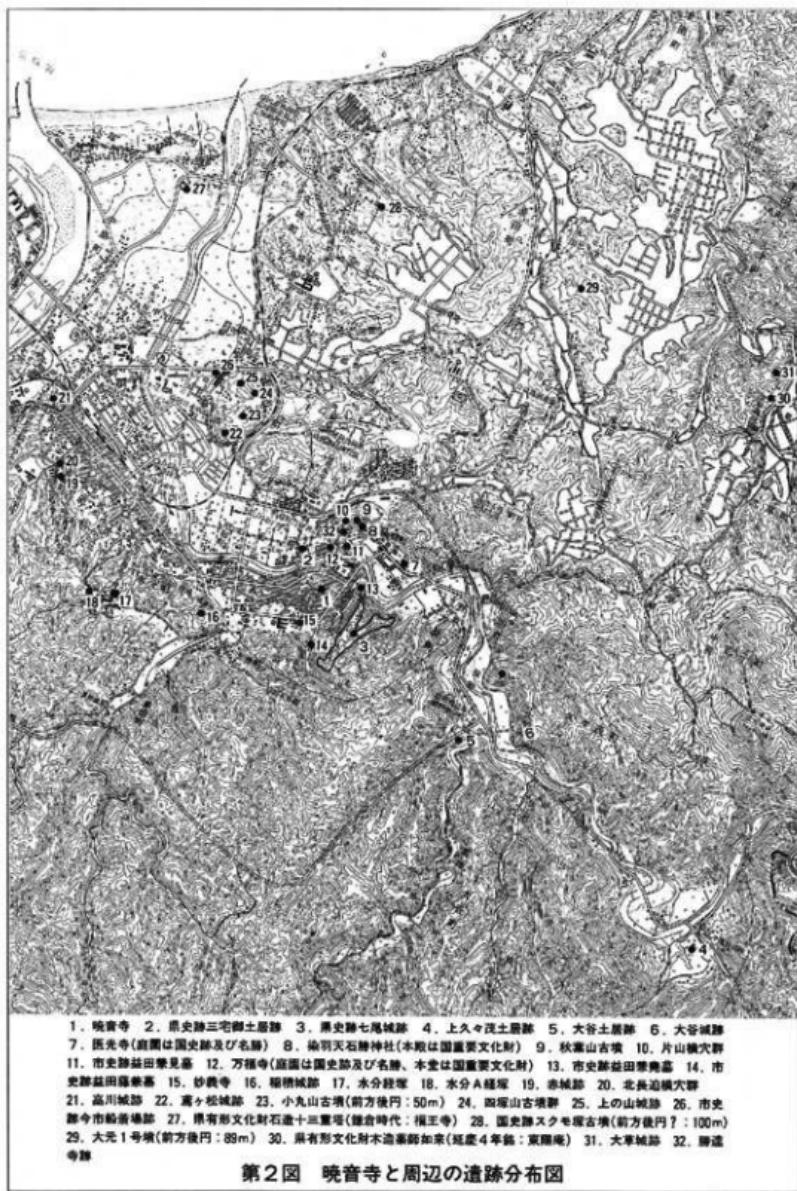
益田市は、島根県の最西端に位置し、山口県と県境を接する。市域の北は日本海に面し、背後は丘陵地に囲まれる。市街地は、益田川と高津川の二大河川によって形成された沖積平野を中心に広がり、人口はおよそ52,000人で、国道と鉄道が分岐する交通の要衝地でもある。平成5年7月には待望の石見空港が開港し、県西部の中核都市としての発展が望まれている。

さて、益田市は、山陰地方にあっては気候も温暖で、古来より恵まれた気候と地勢により、古代から数多くの遺跡が存在する。縄文後晩期の安富王子台遺跡、三角縁神獣鏡が出土した四塙山古墳、直径約57mの造出付円墳と考えらえる国史跡スクモ塙古墳、全長約52mの前方後円墳である市史跡小丸山古墳、群集墳の県史跡鶴ノ鼻古墳群、片山横穴群、北長追横穴群などがよく知られた遺跡と言えよう。

中世以降になると、地方豪族益田氏に関連する遺跡が数多く存在する。特に、当時の城下町にあたる益田地区は、益田市のなかでも中世の遺跡や文化財が集中して残る地区である。益田氏の居館跡である県史跡三宅御上居跡や拠城であった県史跡七尾城跡のほか、式内社で本殿が重要文化財に指定されている染羽天石勝神社、また、同社の別当寺勝連寺跡、雪舟作と伝えられる史跡及び名勝医光寺庭園や万福寺庭園、さらに文永年間の創建といわれる妙義寺など益田氏との関わりが特に深い神社仏閣が残されている。なお、現在医光寺に残る県有形文化財の総門は元七尾城の大手門であったと伝えられている。この他、益田氏の支城をはじめとする中世の山城跡が市域に30以上分布し、蒙古の襲来（元寇）に備えて築かれたといわれる防壁跡も飯浦や唐音など海岸部に残る。さらに、益田川沿いの上流には益田氏の家臣の館跡と推定される上久々茂土居跡や大谷土居跡があり、今市には益田氏の貿易拠点の名残りをとどめる市史跡中世今市船着場跡がある。

関ヶ原の役のあと、益田家20代元祥が毛利氏に従って長州須佐に移ると、益田は高津川を境に浜田藩と津和野藩に分かれて明治を迎える。

今回発掘調査対象とした曉音寺境内地角の鍵曲り状の道は、市街地の南東、益田市七尾町に所在し、曉音寺は周囲よりも65cmほど高い台地上に立地する。曉音寺は七尾城下町の中央部に位置し、鍵曲り状の道は七尾城跡と三宅御上居跡を東西に結ぶ道（市道片山住吉線）とそれに直行する妙義寺への参詣道（市道新丁山根線）が交差する部分にあたる。



第2図 晩音寺と周辺の遺跡分布図

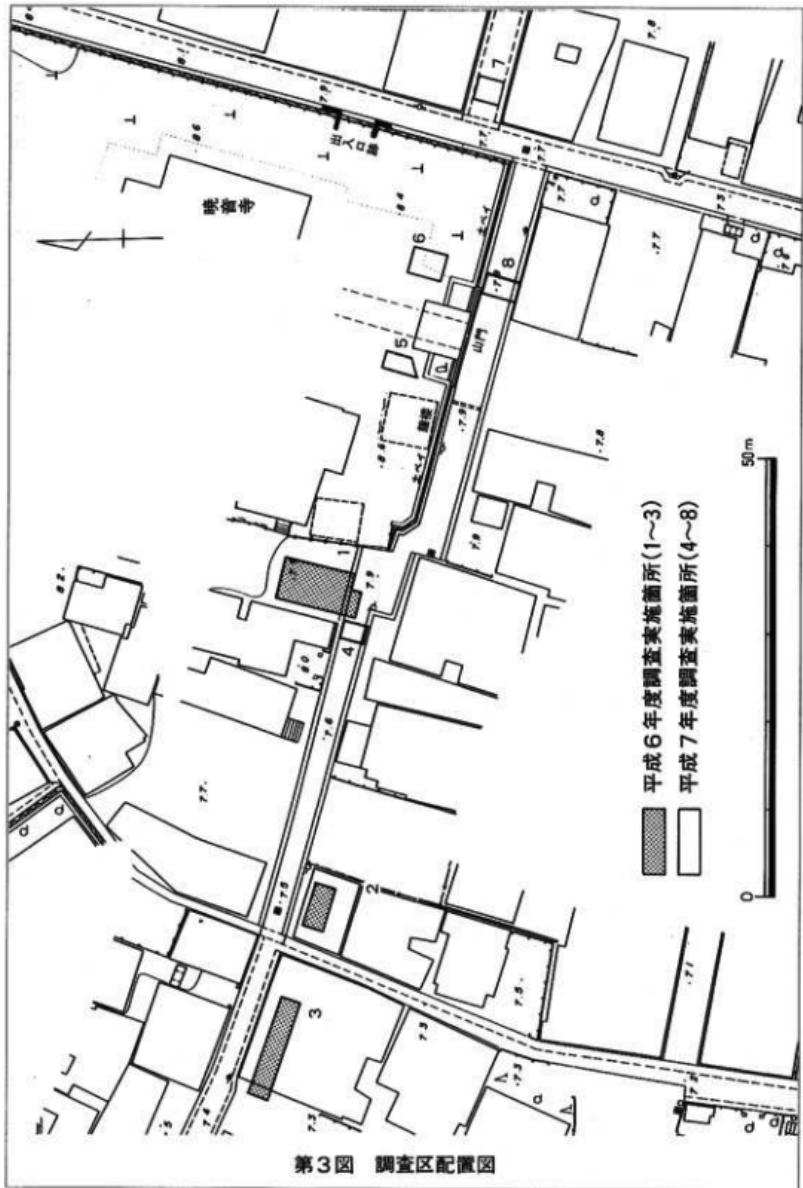
### III. 晓音寺の歴史と縁起

浄七宗智恩院末寺の五更山曉音寺は、水害等のために古文書などの記録類が残っておらず、由緒について不明な点が多いが、一説には「曉音寺の創建は天正6年（1578）のことである」といふ。本尊を阿弥陀如来とする。二代目住職縁起の時代に、創建当初の寺地を嫌った縁起によって現在の場所に移転された。なお、移転にあたって縁起は、慶長6年（1601）当国大森銀山奉行として赴いてきた大久保長安に、増野甲斐守屋敷跡を寺地にすることの許可を得たという。移転にあたって先ず仏像だけをそこに安置し、本堂などの再建移転については江戸時代の宝曆年間にまで降る」と言わされてきた。

益田市教育委員会では、平成7年度の曉音寺周辺発掘調査と並行して市内全域を対象として、中世城下の構造に関する手がかりを得るために社寺や益田氏に関わりのある旧家等所蔵の古文書の調査（平成8年度まで継続予定）を実施しているが、この調査の中で曉音寺歴代住職の位牌を写したもののが確認された。それによると、初代住職在籍の在住年が43年で天正13年（1585）に死没していることから創建は天文12年（1543）のことと考えられ、これまで言われてきた創建年より35年遡ることとなる。その他、貞享2年（1685）に客殿と庫裏、宝曆3年（1753）に本堂と大手築地塀が、文化2年（1805）に鐘楼堂が建立されたことなどが断片的に分かること、創建当初の寺所在地については不明である。また、この古文書調査において、曉音寺は益田氏の重臣である社寺奉行増野甲斐守屋敷地跡に建つとの記載がある右田家文書と現在の曉音寺の場所が屋敷跡と示されている近世末頃の絵図（山口県文書館所蔵）がみつかっていることから、曉音寺は増野甲斐守屋敷地跡に建っていることは間違いないと言える。

現在は、本堂が南向きに建ち、南側に突出した境内の内側に、本堂に向かって正面に山門が、そしてその西側に鐘楼が建っている。その他、本堂背後の墓地の一隅には、慶長9年（1604）銘美濃地二代の墓石がある。この美濃地家は、元來秦氏の出で、祖先は雲州富田城主尼子氏に仕え、のちに右州美濃郡美濃地村に移り住み美濃地をもって姓としたといわれる。応仁・文明の頃、美濃守信為は益田に移り、益田家15代兼亮に仕えた。この信為には、兼亮の援助を受けて益田上本郷村に上居庵を建立し、その報恩として雪舟に兼亮寿像を描かせたと言う逸話が残る。曉音寺にある美濃地二代の墓は、道川村に移り住んだ信為の子孫にあたる2代目美濃地彦左衛門のもので、美濃地家は道川村で鉛事業が始まってからは代々道川村の鉛支配人として尽力し、時には庄屋をつとめている。また、山門東側には右田宗味のものと伝えられる墓石がある。この右田宗味は、益田氏が七尾城を廃城として長州須佐へ移ったことで閑散としてしまった七尾城下町にかつての繁栄を取り戻そうとして、毎月6回、2、7のつく日に六斎市（六斎とは、主として3月から6月まで1ヶ月中2・7・12・17・22・27の6日を神仏の斎日に指定したことによる）を開いて益田の商業の発展に貢献した人物である。この六斎市は昭和14～15年頃までおよそ330年間続いた。現在、右田宗味のものと伝えられる墓石は風化のために倒壊し、その原形をとどめていない。

さらに、境内東側で本堂のはば真横に位置する石垣には、幅4.4m×高さ65cmを測る寺地出入口の痕跡が残り、昭和17年に申請のあった寺院・教会規則認可申請書控で裏門と示されていることから、かつてはそこに門が建っていたことがうかがえる。



第3図 調査区配置図

境内地の南側が張り出して、それに接する市道が屈曲して鍵曲り状となっており、三宅御十店跡と七尾城跡を結ぶ道筋に位置することから、中世七尾城下町の防御に関わる遺構ともいわれ注目されてきた。

#### IV. 調査の概要

発掘調査は、曉音寺周辺部で第1次・第2次調査ともにそれぞれ部分的に発掘を行い、調査の方針及び具体的な実施方法については、現地指導及び調査指導会等で島根県教育委員会、研究者の助言を得た。

平成6年度の第1次調査では、調査の目的を中世から近世にかけての地割りの痕跡を確認することで鍵曲り成立時期を推定することとし、曉音寺の西側を対象に、沖田七尾線都市計画街路事業のために移転し現在は空き地となっている部分で、道路の北側に1箇所、南側に2箇所それぞれ現市道に隣接するように合計3箇所、面積87m<sup>2</sup>の調査区を設定して発掘調査を実施した。

次いで、平成7年度の第2次調査では、第1次調査と同様に地割りの痕跡を確認することで鍵曲りの成立時期を推定し、併せて、中世以前は直線状の道であったのを城下町整備の中で曉音寺境内地を南側に拡張させ鍵曲り状に改めた可能性を検証することを目的とした。調査区は、直線状の道の可能性を考慮して鍵曲りの両端2箇所と境内地2箇所が一直線上に並ぶように設定した。その結果、道の痕跡は確認できず、直線状の道の可能性は否定されたが、鍵曲り成立時期の推定にまでは至らなかった。そのため、通行止めで時間的制約を受けたが山門前に1箇所調査区を追加し、結果的に合計5箇所、面積41m<sup>2</sup>で発掘調査を実施した。

以下、各年度、各調査区の調査結果について述べていく。

#### 1. 平成6年度第1次調査

##### (1) 第1調査区

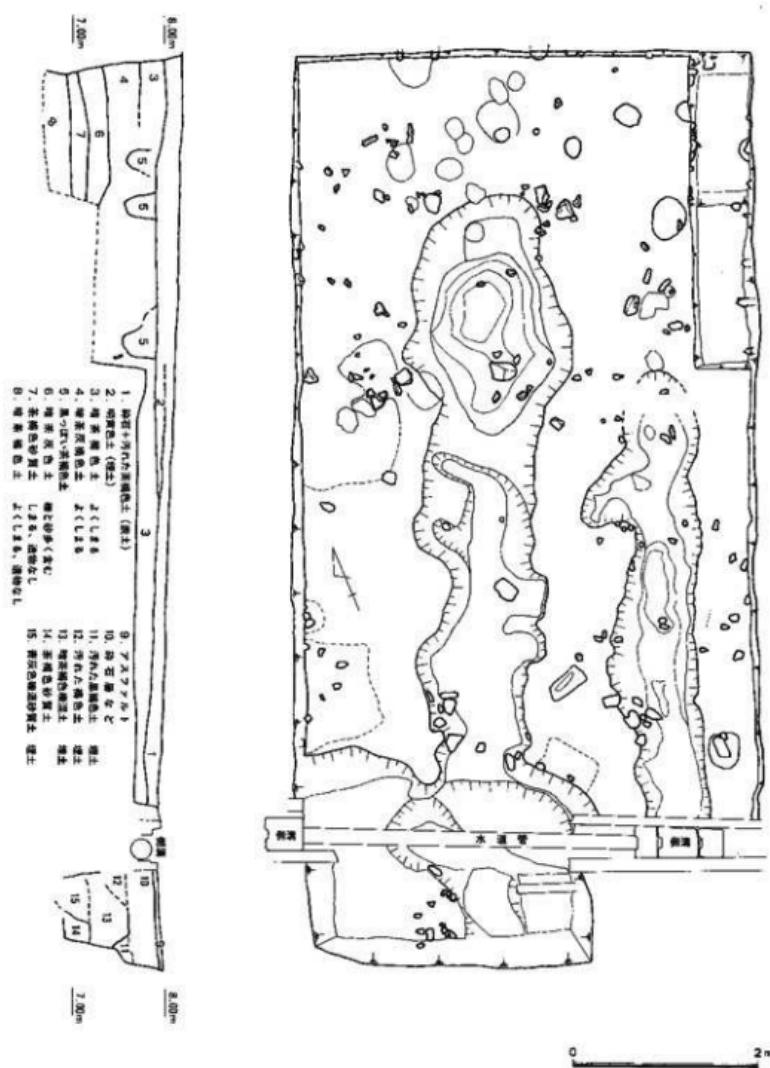
###### ① 発掘調査の結果

曉音寺の西隣りにある駐車場に設定し、土層観察及び遺構確認を行った。この場所は、以前民家が建っていたが、昭和58年の山陰豪雨災害の後に解体され、整地された場所で、現地表は標高約8.0mである。

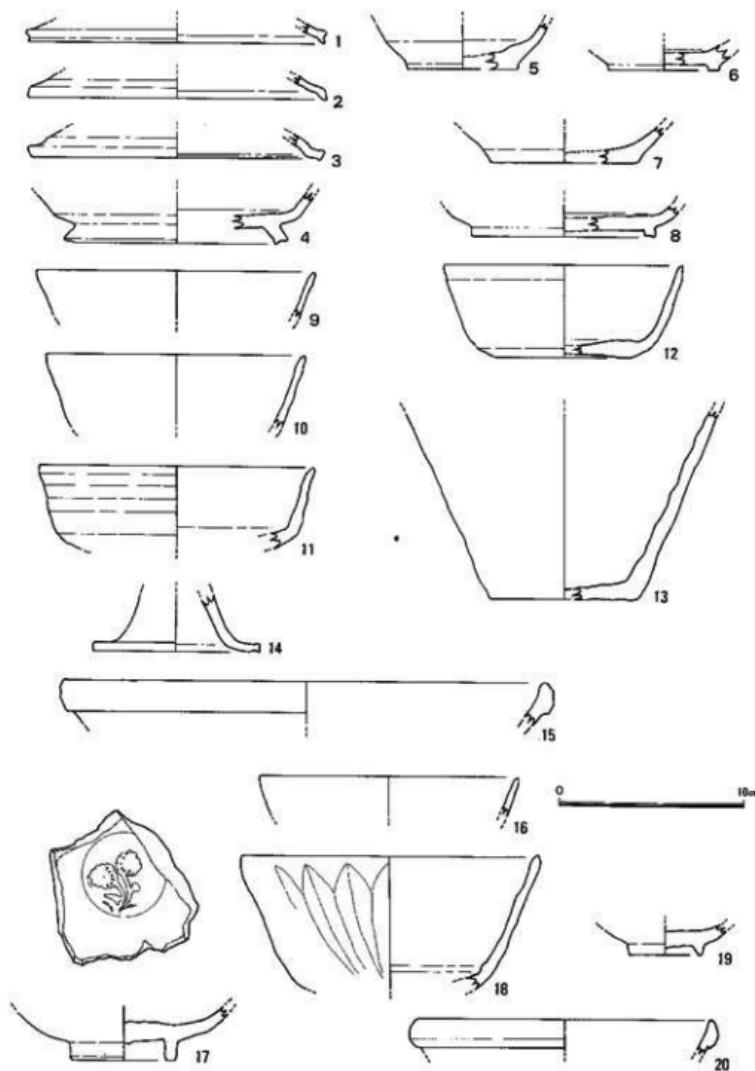
調査区の北側において、標高7.6mのところで堅く締まった茶褐色土が確認され、この面は調査区の南に向かって20cm程度下がっているのが確認された。さらに、この面には20箇所のピット、土壙などの掘り込み跡が確認されたが、これら遺構の発掘は時間的都合により省略している。

調査区の北東隅において、サブトレンチを設定して標高6.5mまで掘り下げたが、遺物を含まない締まった土層が下へ続いており、地盤は安定していた。

なお、調査区の中央部で確認された南北方向にのびる二条のくぼみは、家屋解体時に廃棄物の一部を埋め込んだ穴と思われ、陶磁器、瓦片とともにコンクリート、板、缶などが



第4図 第1調査区平面・土層断面実測図



第5図 第1調査区出土遺物実測図

混在した状態であった。

調査区南側の現市道に拡張した部分は、水道管や側溝の埋設などにより土層が乱れており、道部分の時期変遷の把握はできなかった。

## ②出土遺物

1区からは、いぶし瓦、赤瓦、土器、陶磁器などが多量に出土しており、最も古いものは古墳時代後期以降の須恵器で多数出土している。中世の遺物として、青磁が比較的多数あった。須恵器の器種は、蓋、碗、壺が多数を占める。

### (1)須恵器

蓋(図5-1～3) 1～3は天井が低く、1、2の口縁端部は鳥のくちばし状を呈し、3は口縁部近くでほぼ水平に屈曲し、端部はわずかに下方につまみ出している。

壺(図5-4～8, 12) 4, 6, 8はほぼ方形に近い高台をもつ。4は高めの高台をもち、体部は外方に開く。8は内外面にナデを施す。5, 7, 12は高台をもたない壺で、5の底面には回転糸切り痕が残る。

高壺(図5-9～11, 14) 9～11は壺部の破片である。9, 10は体部から口縁部にかけてほぼまっすぐに立ち上がり、やや尖り気味の端部へと続く。11は高台のつかないもので、器形は箱型に近くかなり深さのあるものである。端部はやや尖り気味に軽く外反している。14は脚部の破片で、やや低く大きく広がる脚をもち、端部は軽く下方へ突出する。

壺(図5-13) 13は平底で体部は直線状に立ち上がる。底径は8cmを測る。

鉢(図5-15) 15は口径26cmを測る大型品である。

### (2)陶磁器類

青磁(図5-16～18) 16は口縁部の破片である。外面無文で、釉は厚く、緑灰色を呈す。17は底部の破片で、幅の広い高台をもち、底径は5.6cmを測る。見込みには印文が施される。釉は透明感のある緑灰色を呈し、高台部疊付およびその内部は露胎である。18は碗口縁部の破片で、外面に鏽迹が施されている。釉は厚く、淡緑色を呈す。

白磁(図5-19, 20) 19は碗の底部で、底径4cmを測る小型品である。胎上は密で、灰白色を呈す。釉は透明度があり、高台にはかからず、内面見込み部分に蛇の目釉剥ぎを施す。20は玉縁状口縁碗の破片で、釉は薄く、白色を呈す。

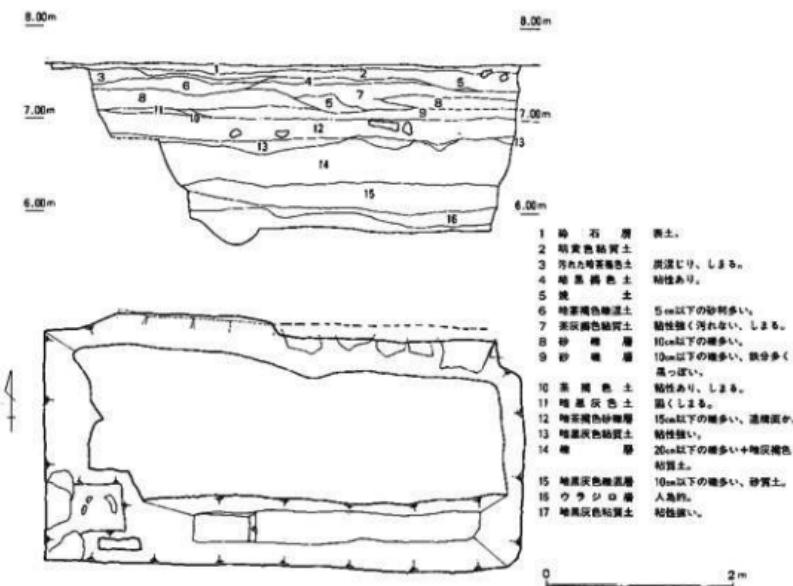
## (2)第2調査区

### ①発掘調査の結果

曉音寺の西側、現市道の南側で、都市計画街路事業によりすでに市が用地取得を終えている場所に設け、現地表の標高は約7.6mである。

標高7.2mまでは近年に埋め立てられた土であったが、その下は砂礫層、礫層、暗黒褐色粘土層、砂礫層、黒褐色粘土層と続いている。最終的に南側にサブトレーニングを設定して標高5.6mまで掘り下げ、さらにその下層はピンホールによる探査で礫層、粘土層と続くと判断された。

遺構面としては、標高7.1m前後で寛永通宝、陶磁器、キセルが出土する面的な状態が確認され、この他に標高5.9m前後で暗黒褐色粘土内に人為的にシダ類を敷きつめた面が確認されたが、その性格は不明で、地割りに関わる遺構は確認されなかった。

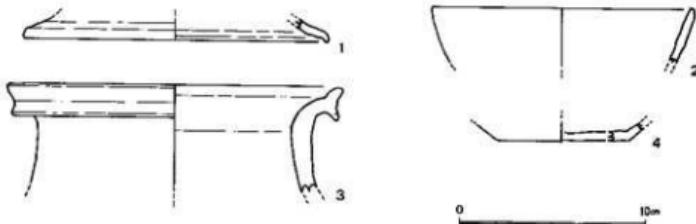


第6図 第2調査区平面・土層断面実測図

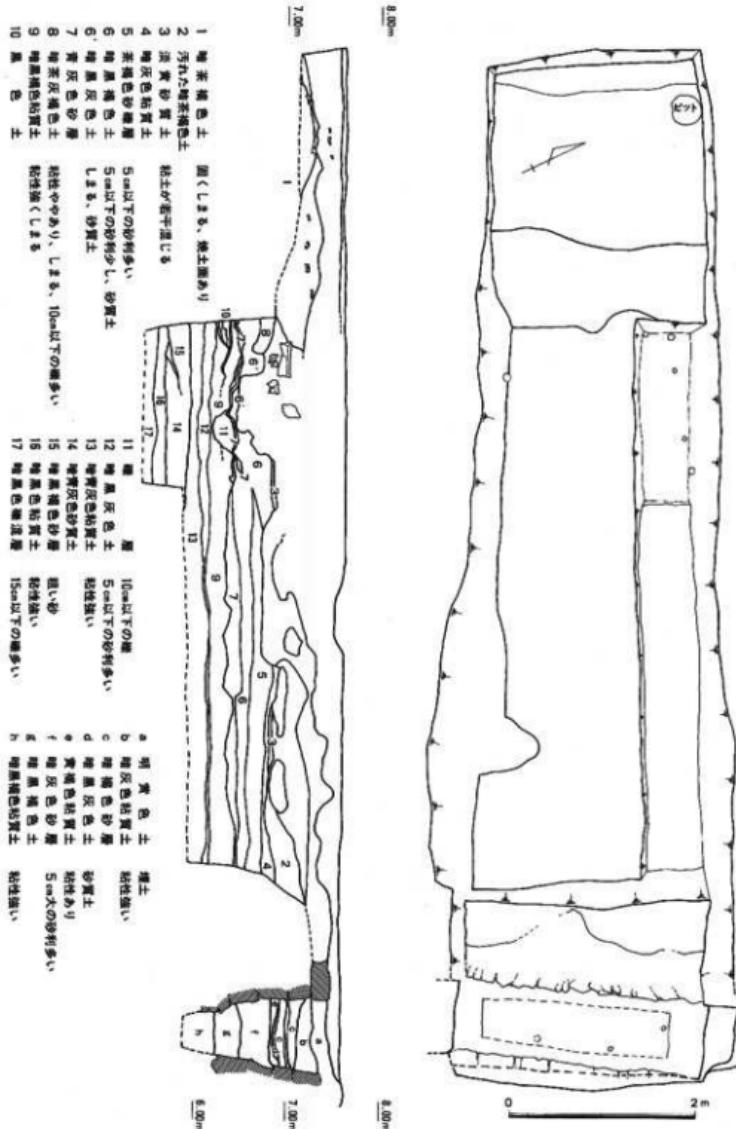
## ②出土遺物

上層からはいぶし瓦片、キセル、古錢などが、最下層にいたるまでの各層からは陶磁器類が多数出土しており、中世に廻ものがわずかに出土した。

1は須恵器蓋の破片で、重機による表土除去時に採取したもので出土層位は不明である。



第7図 第2調査区出土遺物実測図



第8図 第3調査区平面・土層断面実測図

2は13層出土の須恵器環口縁部の破片で、直線上にのび丸い端部へと続く。3、4は6層から出土したもので、3は常滑系の甕と思われる。4は白磁皿の底部片で、白色の釉が全体にかかる。

### (3)第3調査区

#### ①発掘調査の結果

第2調査区より西へ8mの位置で、現市道の南側に接するように設定し、現地表の標高は約7.6mである。

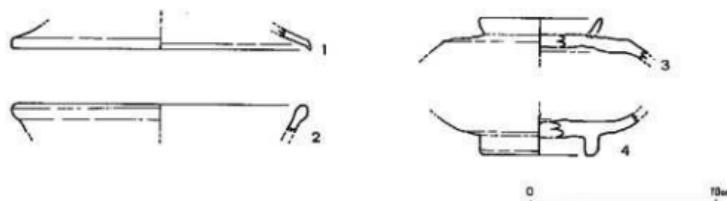
調査区の中央部は場所によって地表から深さ1m近くまで重機による擾乱を受けていたが、それより下は砂層、砂混じりの黒褐色土と続き、南側に設定したサブトレンチ部分では、さらにその下層は、黒褐色粘土から砂層と青灰色粘土の互層が標高5.2mまで続いていた。ピンポールによる探査で、発掘面より下へ60cmからは再び疊層に変化すると判断された。

また、調査区の西端からは南北方向にのびる幅約80cmの石組みの溝跡が発見され、両側の根石まで発掘したが、その深さは現存する上端の石から1.5m（標高6.1m）を測る。

#### ②出土遺物

遺物は、多量のいぶし瓦片、赤瓦片、陶磁器が出土し、特に溝内部からの遺物が多かったが、中世の遺物はごくわずかしか出土していない。

1、2は14層出土の須恵器蓋の破片で、1は天井が低く、端部は鳥のくちばし状を呈す。内外面ともナデを施す。2は天井部に輪状のつまみがつくと思われる。3は重機掘削後に採取された青磁碗の口縁部の破片である。釉は厚く、透明感のある緑灰色を呈す。4は5層出土の青磁碗の底部片で、幅が広く高めの高台をもち、底径6.4cmを測る。見込みには印文が施される。釉は厚く淡緑色で、高台部疊付およびその内側は露胎である。



第9図 第3調査区出土遺物実測図

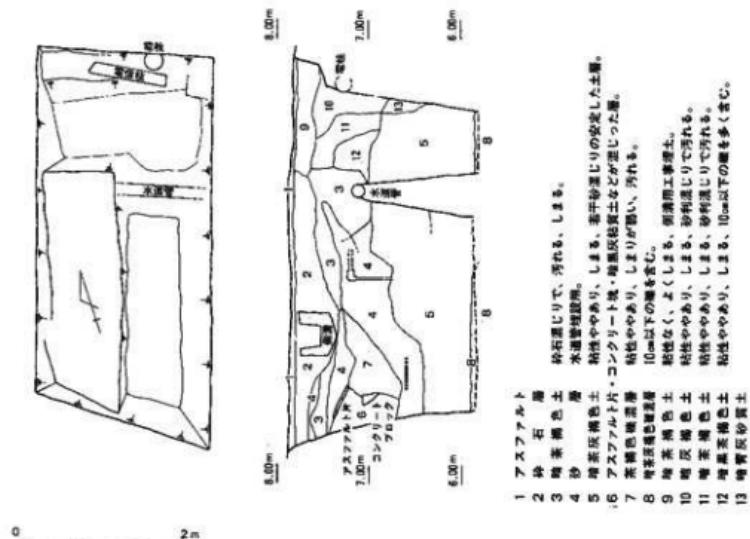
## 2. 平成7年度第2次調査

### (1)第4調査区

この調査区の位置は暁音寺西側の市道部分で、鍵曲りの西端にあたり、道路を横断する形で設定した。現地表は標高約7.8mである。

上層堆積状況は、標高7.0mまでは道路舗装に伴うアスファルト及び碎石屑、水道管の埋設などに伴う擾乱層で、そのすぐ下は、暗茶灰褐色上層、暗茶灰砂層、暗黒褐色砂礫層と続いており、最終的に標高5.8mまで掘り下げたが、道などの遺構面は確認されず、遺物を含まない土層が下へ続いている。さらにその下層はピンボールをさし込んだ感触では、礫層から粘質土層へ続くものと判断された。なお、暗茶灰砂層はわずかではあるが南へ向かって下がっているのが確認された。

遺物は、土師器片、近世以降の陶磁器片が上層の擾乱層より少量採取されたのみで時代を確認することはできなかった。



第10図 第4調査区平面・土層断面実測図

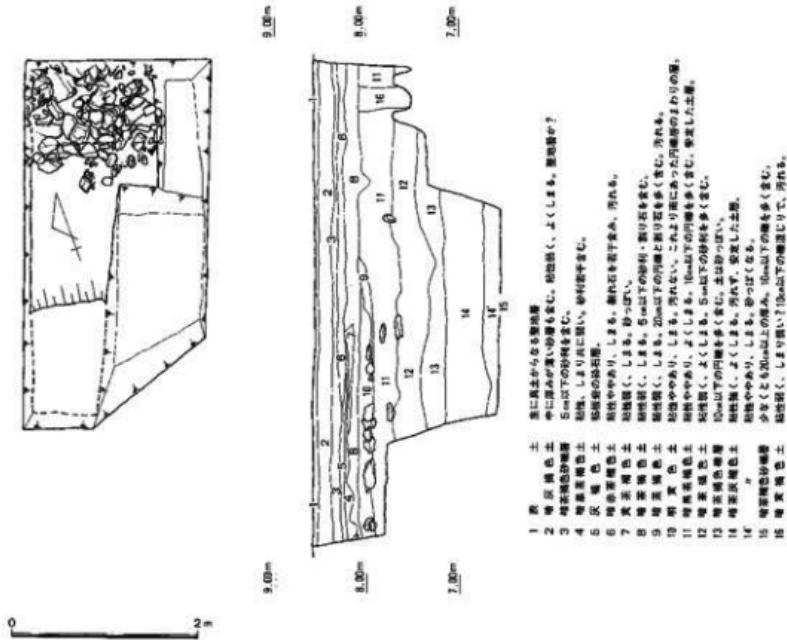
## (2)第5調査区

この第5調査区は、鍵出り部分がかつて直線道路であった可能性を検証するため、境内地内で第4調査区と第7調査区を結ぶ線上に設定した調査区で、境内地の西側、鐘楼の東隣りに設定し、上層の観察及び遺構の検出を行った。現地表は約8.6mである。

土層堆積状況は、深さ30cmまでは埋め立て土であったが、その下は、調査区南側で標高8.1mまでのところでわずかに層の乱れがあるものの、暗茶褐色土、暗黒茶褐色土、暗茶褐色礫層、暗茶灰褐色土、暗茶褐色砂礫層と安定した整地層が続いている。最終的に東側でサブトレレンチにより標高6.4mまで掘り下げたが、遺物を含まない土層が下へ続いているのみであった。

遺構は、道が直線に存在した可能性を示す痕跡は確認されなかったが、調査区南端の暗茶褐色土下層内で10cm~20cmの河原石からなる直径約1mの円形の集石と北端の暗黒茶褐色土下層内で東西方向におよそ2mにわたって並ぶ列石が確認された。しかし、いずれもその性格については不明である。

遺物は、列石内及びその周辺から多量のいぶし瓦片、暗茶褐色土~暗黒茶褐色土層内より近世以降の陶磁器類が出土したが、中世の遺物は出土していない。



第11図 第5調査区平面・土層断面実測図

### (3) 第6調査区

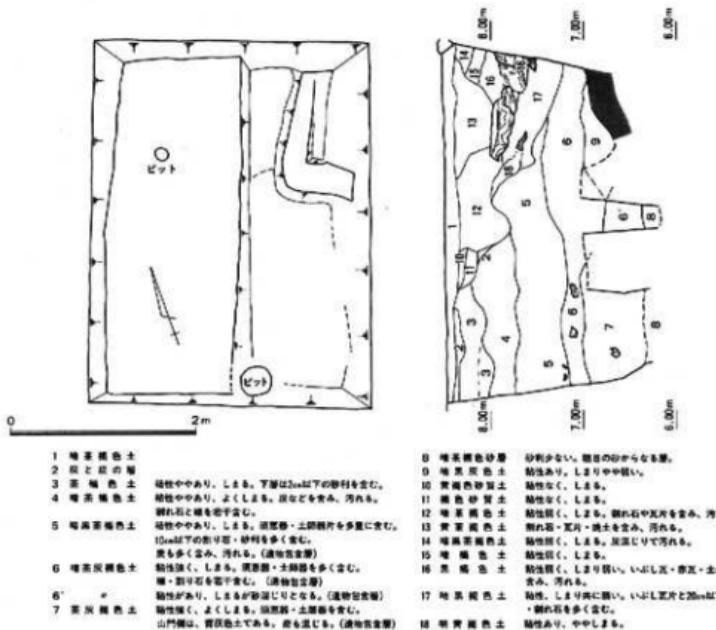
#### ① 発掘調査の結果

この調査区は、第5調査区と同様の理由から境内地に設定したもので、山門の内側の第5調査区から東へ10mのところに位置する。現地表は標高約8.5mである。

調査区北東部において、深さ1.2mの土壤の一部が確認されたが、土壤内から近世の墓石や瓦片、陶磁器類、木杭などが混在して出土しており、土壤は近世以降に廃棄物を投棄するためにつくられたものと考えられた。なお、この土壤により調査区北東部から南東部

にかけて攪乱をうけており、かつて直線状の道が存在した、あるいは寺院の区画に関わるような痕跡は確認されなかった。

その土壤の下（標高7.7m以下）には、奈良時代を前後する頃から平安時代前半にかけた須恵器、土師器を多量に含む暗黒茶褐色土、暗茶灰褐色土、茶灰褐色土の安定した土層が堆積し、砂層へと続いている。また、調査区北側の標高6.9mのところで、出土した須恵器に伴う古代遺跡の遺構面の一端と思われる固く締まった黄褐色土が一部確認された。



第12図 第6調査区平面・土層断面実測図

## ②出土遺物

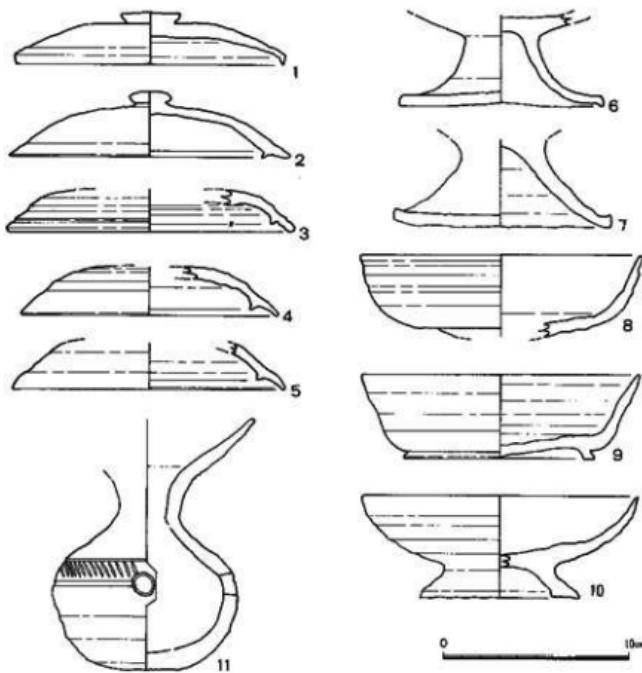
この調査区から出土した遺物はコンテナに換算して須恵器が1箱、土師器が4箱、近世以降の陶磁器類が1箱である。

蓋（図13-1～5） 1はボタン状のつまみをもつ。口縁端部は下方へ屈曲し、口縁部は短く、ほぼ垂直に下り、端部は鳥の嘴状を呈する。2は器形は偏平ながら丸みをもっており、口縁部はやや外反して、丸い端部に続く。返りは小さく、口縁部の器壁は厚い。つまみについては整った宝珠状のものではなく、簡略化したもので、丸みを帯びボタン状をしている。3は口径15.6cmを測る大型品で、器高は低く、返りは小さい。体部は内弯気味に下り、口縁部はやや外反して丸い端部へと続く。口縁部に1本の沈線が入る。4、5は口径に対する器高が低く、返りは小さい。

坏(図13-8~10) 8は復元口径が15.2cmを測る。高台はなく、体部は内弯気味に上がり、端部でやや外反する。9, 10は高台を持つ坏である。9はほぼ方形で低めの高台を持つ。体部は内弯気味に上がり、口縁部近くでわずかに外反し、丸い端部へと続く。10はかなり高くふんばる高台を持ち、坏体部はやや浅めで曲線的に広がる。脚部は、端部が下方へ軽く突出する。

高坏(図13-6, 7) 6はやや低く外反気味に下る脚を持つ。裾部は軽く下方へ突出する。7はやや低く大きく広がる脚を持ち、端部が軽く上方へ突出する。

鷹(図13-11) 口径11.6cm、器高13.5cm、頸部最小径3.3cm、胴部最大径10.0cmを測る。頸部は外反して広がるが、口縁部は内弯しながら立ち上がる。底部は平坦である。胴部の上位から中位にかけて穿孔部を挟むように2条の沈線が施され、その間にヘラ状工具による刺突文が施されている。



第13図 第6調査区出土遺物実測図  
(1, 2, 4, 5, 6, 8, 10, 11…7層, 3, 9…5層, 7…6層)

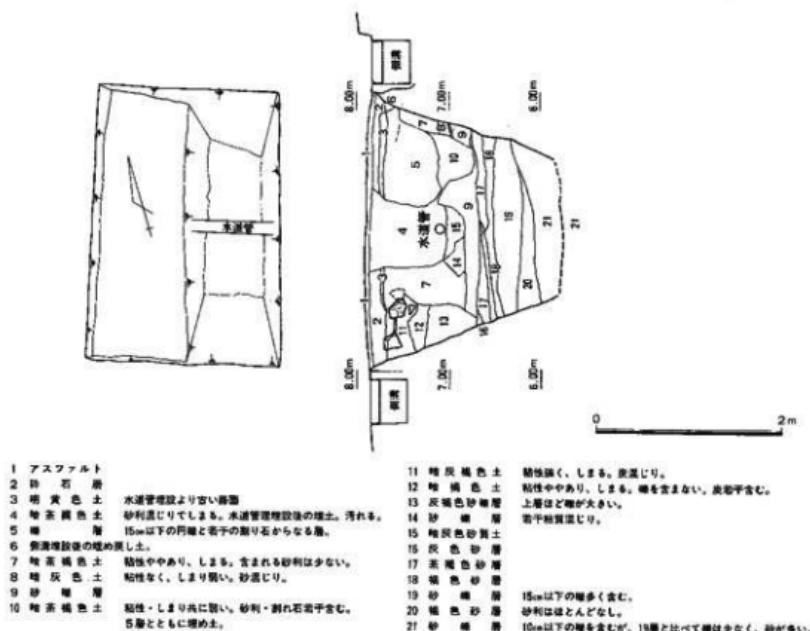
#### (4)第7調査区

曉音寺東側の市道部分に設けた第7調査区は、現地表の標高が約7.9mで、深さ1mまで

は水道管や側溝埋設などのために攪乱を受けており、攪乱層の下は、最終的に標高5.7mまで掘り下げたが土の堆積層はみられず、若干の鉄分を含んだ砂礫層と砂層が交互に堆積する状態であった。

また、調査区南端の標高7.5m前後において、現在の側溝に並走する形で東西方向に延びる、幅40cm、深さ20cmの石組みの溝跡が発見されたが、溝内から遺物は出土していない。この他に造構は確認されず、道路面も確認されなかった。

遺物については、全く出土していない。



第14図 第7調査区平面・土層断面実測図

### (5)第8調査区

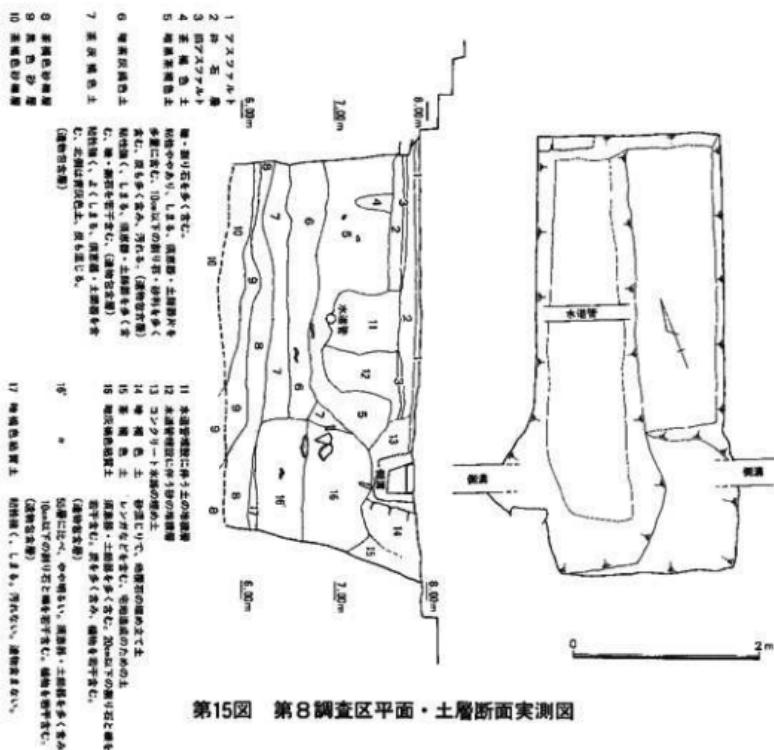
#### ①発掘調査の結果

山門前の市道部分に設定した第8調査区は、地表（標高7.9m）から中央付近では水道管埋設により深さ1mほどまで、南側は側溝埋設により深さ60cmまで攪乱を受けており、その攪乱層のすぐ下が6区から続く古代遺物包含層の暗黒茶褐色土、暗茶灰褐色土、茶灰褐色土の堆積であったために、道の時期変遷を確認することはできなかった。なお、この遺物包含層はそのすぐ下の砂礫層とともに南へわずかに下がりながら堆積していた。

また、調査区南側の側溝の下には、前述の包含層を分断する形で暗青灰色粘質土があつたが、これはその包含層と同じ遺物を多量に含んでおり、調査区南端の状況から水に関わ

るもので色調のみの迷いと考えられた。なお、木根などの植物性遺物も若干含まれていた。

第8調査区から道路の痕跡は認められず、中世の遺物も出土していない。



第15図 第8調査区平面・土層断面実測図

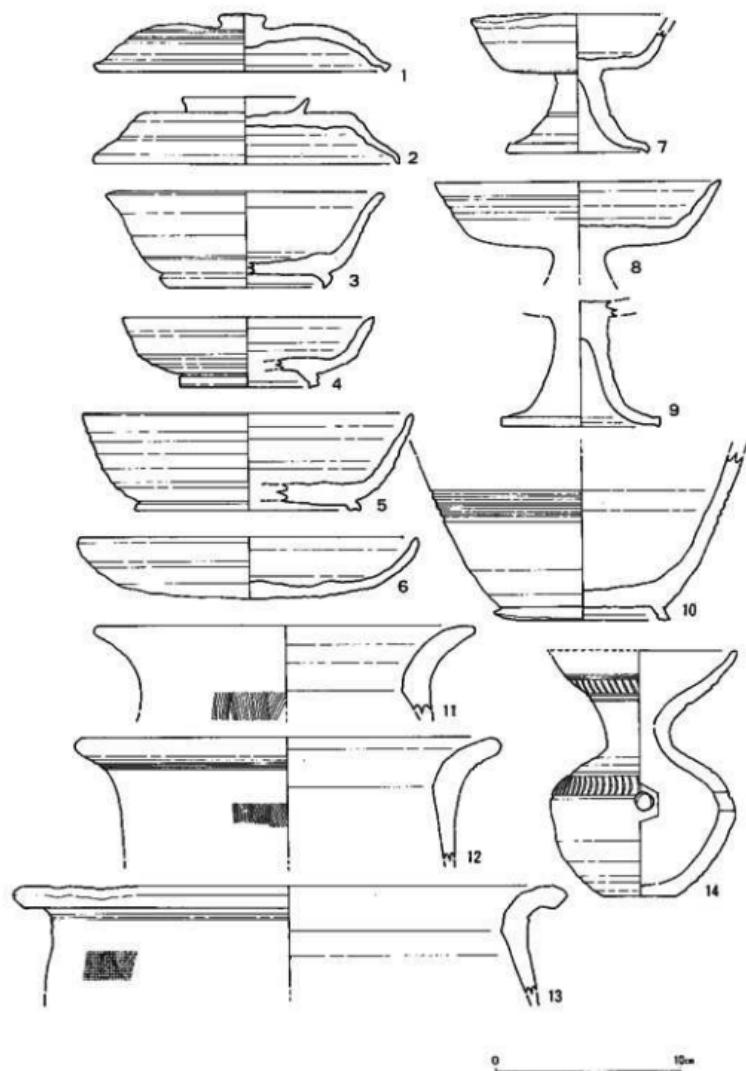
## ②出土遺物

この調査区から検出された土器類は、須恵器と土師器に2大別でき、コンテナで須恵器が3箱分、土師器が2箱分になる。

須恵器 須恵器の器種は、蓋、壺、高壺、壺、甌の5種類があり、その他のものは確認できなかった。この中では壺と甌が多く、甌は1点のみの出土である。

蓋(図16-1, 2) 1は肩部に2本の沈線が廻り、ボタン状のつまみを持つ。肩部はなだらかで、口縁部は外反し、端部でやや軽く屈曲して下方へのびる。2は輪状のつまみをもち、肩部は張り、口縁端部は下方へ屈曲して丸い端部へと続く。

壺(図16-3~5, 10) 3は断面三角形の高台をもつ。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反して端部にいたる。4は方形に近い高台をもち、体部から口縁部にかけて外反気味に立ち上がり、やや尖る端部にいたる。5はやや外開きの体部に



第16図 第8調査区出土遺物実測図  
(1、2、3、4、6、8、9、11、12、14…7層、5、10…18層、7、13…8層)

低い高台がつく。10は体部が外方に開いて直線状に長くのび、高台は低く方形に近い。

高坏(図16-7, 8, 9) 7は坏部がやや浅めで、脚部に1条の沈線を施し、端部は下方へ屈曲する。全体に自然軸がかかり、坏部底外面にヘラ記号(×)をもつ。8は丸くやや浅めでかなり広がる坏部をもつ。脚部については不明。9はやや低く大きく広がる脚をもち、端部が軽く下方へ突出する。

醜(図16-14) 口径10.6cm、胸部最大径9.9cm、頸部最小径3.6cm、器高13.2cmを測り、全体に自然軸がかかる。胴部の上位から中位にかけて2条の沈線が施され、その間にヘラ状工具による刺突文が廻らされている。また、頸部上位にも同様の2条の沈線との間に板状工具による刺突文が廻らされている。

土師器(図16-11~13) この調査区から出土した土師器は、全て甕の破片である。11~13とも胴部の器壁は薄く直線状にのび、頸部から口辺部にかけて「く」の字状に屈曲し、器壁も厚くなる。11は口縁部の内外面にヨコナデ、体部の外面にハケ目、内面にはヘラケズリを施し、口縁部の内外面に煤が附着する。12は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にハケ目後ナデを施す。体部の内面にはヘラケズリを施し、口縁部から体部上半にかけての外側に煤が付着する。13は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にハケ目後ナデ、体部内面にヘラケズリを施し、体部上半の内外面に煤が付着する。

## V.まとめ

調査の結果、全ての調査区で地割りの痕跡は確認できず鍵曲り状の道に関しては成立時期を積極的に裏付けすることができる成果は得られていないが、中世から近世にかけての地割りを残していることは確実と考えられるようになった。また、第6・8調査区から奈良時代前半から平安時代前半にかけての須恵器と土師器が出土しており、その他の調査区からも古代から中世さらには近代をも含めた幅広い時期の遺物が出土している。

曉音寺鍵曲りの評価 先に述べたように、どの調査区からも町割りの痕跡は確認されていない。境内地を除いた6つの調査区では、いずれも地表から40cm~1mの深さまでアスファルト舗装や水道管などの埋設の為に搅乱を受けていた。その中で第8調査区では、搅乱層に続いてすぐ(標高7.5m以下)に第6調査区から続く古代の遺物包含層があることから、この他の道路部分に設定した調査区でも中世以降の生活面は地表から深さ約40cmまでの間にあるものと考えられ、中世から近世にかけての道の痕跡が存在していたとしても度重なる道路整備工事により掘削されている可能性が高く、現在では当時の道の痕跡を確認することは不可能と考えられる。

その一方で、直線状の道であったか否かを検証するために設定した境内地部分の調査区の結果がある。曉音寺前の鍵曲り状の道は城下町などによく見られる防御を意識した食い違い道の形態をしており、同様の意味をもっていたと考えられていた。鍵曲りの成立が益田氏の七尾城下町整備に起因する防御のための造構とするならば、それ以前には直線状の道が存在した可能性があり、その痕跡が確認されれば鍵曲り成立時期の上限を推定することができる。このような可能性を想定して境内地に調査区を設定して調査を行ったが、その結果道や境内地の区画に関わるような痕跡は確認されず、曉音寺前を通る道は元来鍵曲

り状で直線状の道を改修したものではないと判断できた。

鍵曲り状の道を考えるうえで、その成立の理由や歴史的背景を抜きにして考えることはできず、都市構造の変遷や産業、地形などの地理的要因が大きく関わってくる。

その1つである都市構造の変遷から鍵曲り状の道の成立を考えてみると、まず七尾城下町における中世から近世への転換は、益田氏の須佐への移住に伴う武士から商人の町への転換で、七尾城が廃城となったことで近世城下町への移行がなく、中世城下町の大規模な改修が行われないまま今日に至ったことは幸いであった。さて、中世において妙義寺は益田氏の菩提寺であるだけでなく、益田家家臣団=七尾城下町の精神的支柱の1つとして独自の社会的・宗教的機能を果たしていたといわれる<sup>3</sup>。このことから中世七尾城下町の中で妙義寺への参詣道で現在でいえば新丁山根線の持つ意味は大きかったと推測され、この当時に大橋から東側の片山住吉線は存在しないあるいは存在したとしても小路程度であったと考えられる。その後、近世への転換の中で住吉神社への参詣を目的として現在でいう片山住吉線が整備され、次第に妙義寺参詣道から住吉神社参詣道へと持つ意味をえていったと推測される。この整備の中で南へ張り出す曉音寺境内地を迂回する形で鍵曲り状の道が成立したと考えられる。

また、地形的要因から考えてみると、例えば曉音寺周辺のもとの地形は次のような調査結果から推定することができる。まず、第6調査区で確認された古代の遺物包含層は南に向かってわずかに下がっていたこと、そして境内地の南側（第2～4、8調査区）は粘質土や砂が堆積した軟質の地層で

あり、東側（第7調査区）では砂礫層の堆積が見られたのに対して、境内地では古代の遺物包含層があるなど安定した地盤であったこと、第6調査区の包含層の上面と第8調査区で確認されたそれとの標高差は、第8調査区では上部が削り取られている可能性があるものおよそ20cmであったことなどから、境内地の造成による盛土を考慮すれば、古代と現代の地形にそう違ひはないものと思われ、本米曉音寺の一角の地形は周辺よりも一段高い微高地にあったと考えられ、曉音寺周辺では古代から現代に至るまで大きく地形に手を加えることなくこの地形を活かした土地利用がなされてきた、つまり、曉音寺は元来南側に張り出していてそれを迂回するこ

1. 庚申丁角
2. 庚申町
3. 新戸南平後
4. 新町後
5. 新道
6. 下市山平後
7. 古川下ノ平後
8. 下市川平後
9. 晓音町



第17図 明治初年頃の小字名分布図

(広島大学附属図書館所蔵を井上が作図より長澤が作図)

とで鍵曲り状の道が成立し、近世、近代を経て現在に至るものと推定される。

発掘調査で鍵曲りの成立を中世まで遡らせるような結果は得られなかったが、字名がこの市道片山仕古線を境に上下に分かれることや七尾城下町の東西の道が中世によくみられるように大きく交差する町割の構造から成立が11世に遡る可能性もなお残されている。古文書調査により鍵曲りが少なくとも近世には存在していたことが明らかとなり、また、曉音寺が益田氏の重臣であった寺社奉行増野甲斐守の屋敷跡に建っていることが判明した。このことは、たとえ鍵曲りの成立時期が近世であったとしても曉音寺境内地自体が中世以来の区画を残していることを示すものであり、新たな歴史的重要性の認識を必要とすることう意味する。

益田地区には中世をはじめとして近世以降の史跡や文化財も数多く残されているが、その中でも曉音寺は三宅御上居跡と七尾城跡の拠点を結ぶ線上に位置し、中世末期にしかも益田氏の重臣の屋敷跡に創建された由緒を持つ。中世七尾城下の歴史的な景観の復元については多くの課題が残されているが、前述のように鍵曲りが近世には成立していたことは明らかであり、中世の名残を色濃く残しながら近世への転換によって意味を増す経過を示す象徴としての歴史的な意義は大きく、歴史的景観としても重要と考えられる。

**古代・中世の遺物について** そのほとんどが第6・8調査区の包含層からの出土であり、器種としては須恵器が蓋・壺・高壺・壺などがあり、壺が2点出土したが、量的には壺・壺が多かった。土師器は壺のみの山上である。

この時期の須恵器については大抵遺跡で編年がなされており<sup>9</sup>、この編年の特にⅢ期のものが多い。時期としては、奈良時代を前後する時期から平安時代にかけて、つまり、8世紀前半から9世紀前半にかけてとして大過はないと考えられる。

一方、出土した中世の遺物の全ては平成6年度調査によるもので、少量ではあるものの全ての調査区から山上しており、平成7年度調査では皆無であった。

今回出土したものについて、白磁に関してはその大半が碗の破片で、この他に皿の破片がみられた。これらはいずれも14世紀代の所産と考えられる<sup>10</sup>。

青磁に関しては、銘蓮弁をもつ龍泉窯系の碗（図5-18）など中国製の輸入青磁碗がほとんどであった。その時期については、14世紀から15世紀所産と比定される<sup>11</sup>。

出土遺物の更なる検討は、中世における曉音寺を含めた城下町の解明と併せて今後の課題としたい。

#### -註-

1. 益田市史編纂委員会『益田市誌』上巻 1975年
2. 矢富熊一郎『石見匹見町史』 1965年
3. 矢富熊一郎『益田町史』上巻 1952年
4. 井上寛司・岡崎三郎『史料集・益田兼見とその時代－益田家文書の語る中世の益田(1)－』「77. 益田祥兼置义条々」1994年  
井上寛司・岡崎三郎『史料集・益田兼見とその時代－益田家文書の語る中世の益田(2)』「2. 妙義庵寄進山島等注文」1996年
5. 須恵器の時期については、鳥取県埋蔵文化財調査センター西尾克己氏からご教示をいただいた。  
鳥取県教育委員会『石見空港予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－大益道路－』1992年

6. 倉入陶磁器の時期については、広島県立美術館主任学芸員村上勇氏にご教示をいただいた。

7. 註6と同じ

#### 参考文献

- ・益田市教育委員会『一宅御土居跡』1991年
- ・益田市教育委員会『三宅御土居跡II』1992年
- ・鳥根県教育委員会、建設省浜田工事事務所『上久々茂土居跡・大峰遺跡－一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』1994年
- ・益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群I－勝連寺跡・七尾城跡－』1993年
- ・益田市教育委員会『益田氏関連遺跡群II』1994年
- ・益田市教育委員会『本片子遺跡・木原古墳』1982年
- ・鳥根県教育委員会『口脚遺跡 口脚住宅地予定地内発掘調査報告書－』1985年
- ・鳥根県教育委員会『鳥根県埋蔵文化財発掘調査報告書 第V集』1974年
- ・鳥根県教育委員会、建設省浜田工事事務所『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II』(鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久木奥窓跡) 1996年
- ・上野秀夫『貿易陶磁研究 NO.2』「14～16世紀の青磁碗の分類について」1982年



# 写 真 図 版





調査地遠景



鍵曲り(東から)



鍵曲り(西から)

図版2



第1調査区  
発掘状況  
(北から)

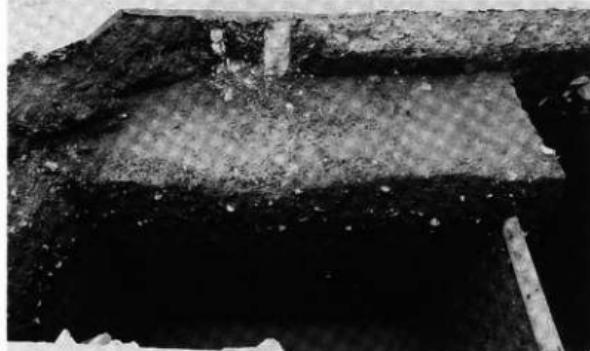


第2調査区  
発掘状況  
(東から)



第3調査区  
発掘状況  
(西から)

図版3





第5調査区  
発掘状況  
(北から)



同上  
列谷  
(南から)



同上  
土層堆積状況  
(西から)

図版5



第6調査区  
発掘状況  
(北から)



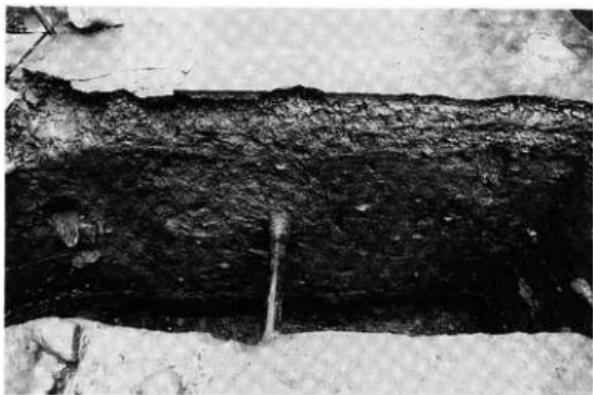
同上  
土層堆積状況  
(西から)



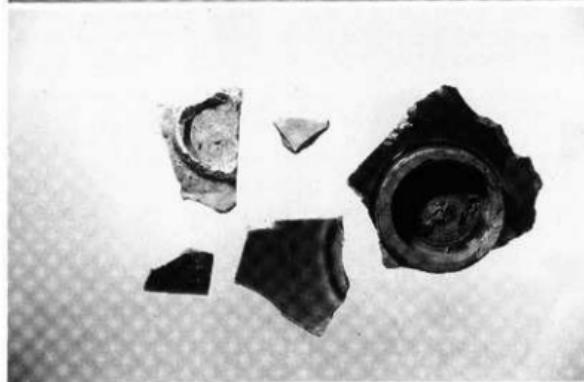
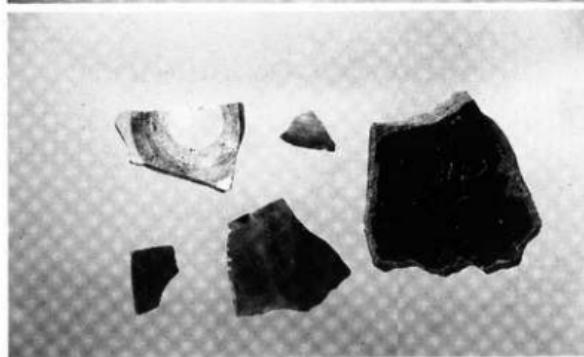
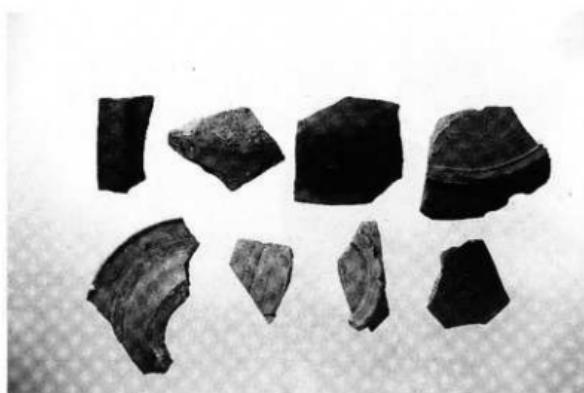
第7調査区  
発掘状況  
(北から)



第8調査区発掘状況  
(北から)



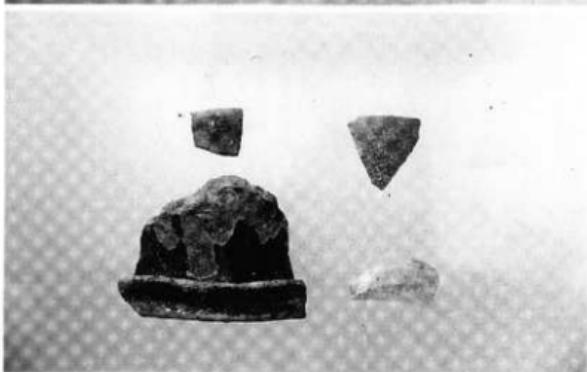
同上 土層堆積状況(東から)



第1調査区出土遺物(1)



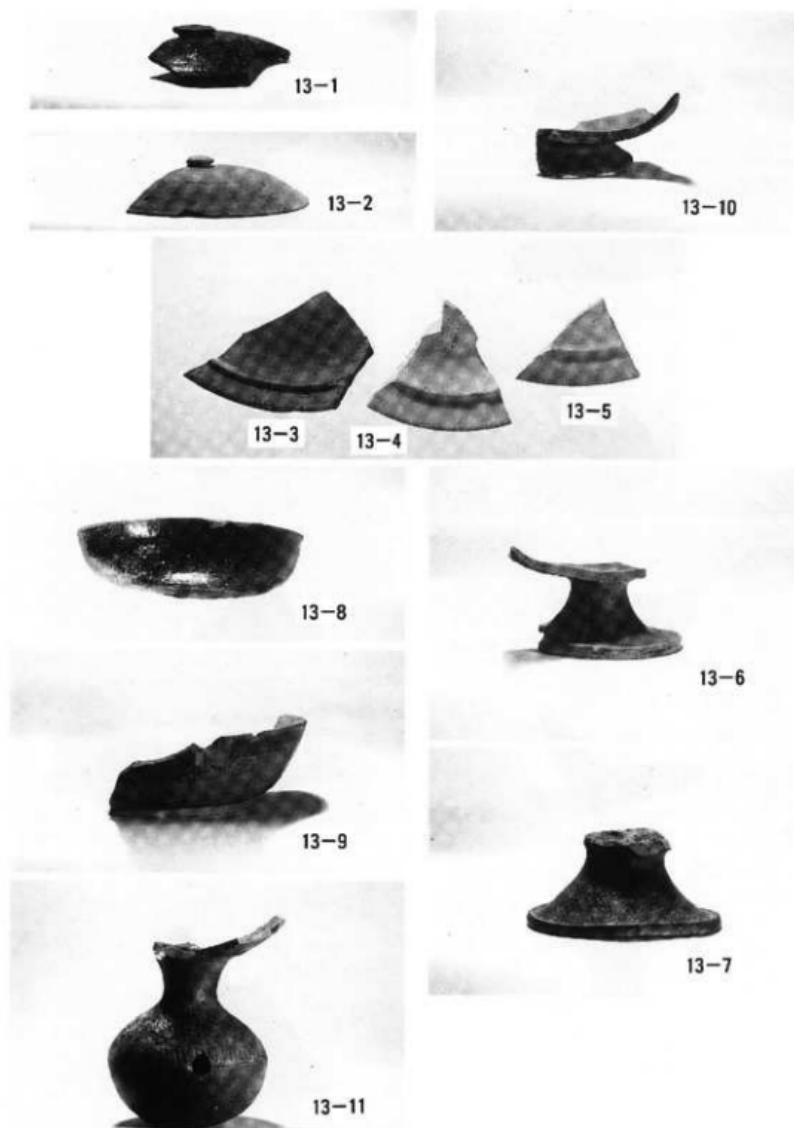
第1調査区出土遺物(2)  
(左上:5-5、左下:5-12  
中央上から5-4、3、2、1  
右:5-13)



第2調査区出土遺物  
(左上:7-1、右上:7-2  
左下:7-3、右下:7-4)



第3調査区出土遺物  
(左上:9-1、右上:9-4  
左下:9-3、右下:9-2)



第6調査区出土遺物



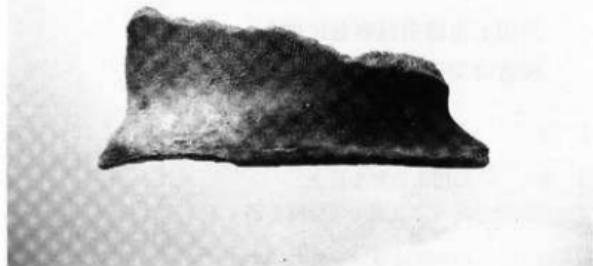
第8調査区出土遺物(1)



16-11



16-12



16-13

第8調査区出土遺物(2)

**沖田七尾線街路事業に伴う  
曉音寺周辺発掘調査報告書**

発 行 1996年3月

編 集 益田市教育委員会  
島根県益田市常盤町1番1号

印 刷 柏村印刷株式会社益田支店  
島根県益田市乙吉町イ336-9